カルタゴ人と海の妖精

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カルタゴ人と海の妖精

【Ｎコード】

Ｎ６５２２Ｏ

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

カルタゴ人の商人がギリシアの海の底にある財宝の話を聞きました。その財宝を手に入れようと財宝を護る妖精に対してしたことは。頭を使うというお話です。

第一章

カルタゴ人と海の妖精

昔々カルタゴという国がありました。
アフリカにあった港町ですがここにです。一人の商人がいました。
商人はあちこちを回って商売をしていました。その時です。
友達の商人にあることを聞きました。
「何でもギリシアの方に凄い財宝があるらしいな」
「財宝？」
「そうだ、財宝があるらしいんだ」
こう友達から聞きました。
「スパルタの辺りにな」
「スパルタにか」
「何か国が買えるだけの財宝らしい」
「そこまで凄いのか」
「どうだい？興味があるかい？」
友達は思わせぶりな笑顔で彼に尋ねました。
「その財宝に」
「そうだね。そこまで凄い財宝ならね」
商人はまんざらではない顔で答えました。
「是非ね。一度ね」
「手に入れるんだね」
「手に入れたいね。丁度いい具合に今度ギリシアに行くし」
「なら余計に好都合だね」
「うん、行くよ」
商人は今度は笑顔になっていました。
「それじゃあね」
「行くといいよ。ただ」

「ただ？」
「そこまで凄い財宝がまだ誰の手にも入っていないのかい」
商人が次に気にしたことはこのことでした。
「また随分とおかしな話だね」
「ああ、それだけれどね」
友達はどうしてその財宝が今まで誰の手にも入ってこなかったのかも言いました。
「実はその財宝にはね」
「その財宝には？」
「厄介な奴が取り憑いているんだ」
「厄介な奴がかい」
「その財宝は海の奥にあって」
その場所も話されます。財宝は海の奥にあるというのです。
「妖精が取り憑いているんだよ」
「それがその厄介な奴かい」
「うん、そうなんだ」
まさにその妖精がというのです。友達は話します。
「かなり性格の悪い奴でね。財宝を狙って来た人間に片っ端から謎々を仕掛けてそのうえで答えられなかった場合にはね」
「殺すのかい？」
「そこまではしないよ。ただ髪の毛を全部刈って陸に追い出してしまうんだ」
そうするというのです。
「そうしてしまうんだ」
「髪の毛をなんだ」
「しかも一生生えないそうなんだ」
つまり禿頭にしてしまうと。そういうのです。
「どうだい？髪の毛は惜しいかい？」
「髪の毛を大事に思わない人もいないだろ」
商人は暗い顔になって友達の言葉に返しました。

「それは」
「そうだよな。誰だってそうだよな」
「随分とえげつない妖精なんだな」
彼はあらためて言いました。
「そんなことをするなんて」
「殺されないだけましかも知れないけれどね」
「それでも髪の毛はないじゃないか」
商人はこのことに暗い顔のままです。
「全く。悪質な」
「そうだよな。けれどどうするんだい？」
友達は彼の顔を見て尋ねてきます。
「その財宝、手に入れるかい？」
「やってみるよ」
その決意は変えませんでした。髪の毛の話を聞いてもです。

第二章

「興味を持ったしね」
「そうか、持ったかい」
「持ったよ。じゃあギリシアに行った時にね」
行くというのです。そうして。
「それでだけれど」
「それで？」
「その財宝の場所が書かれた地図はあるかな」
今度はこのことを尋ねるのでした。
「今君はスパルタの近くの海の底にあるって言ったけれど」
「ああ、あるよ」
友達はにこりと笑って彼のその問いに答えました。
「それはね」
「そうか、あるんだ」
「場所はわかってるんだ」
それはだといいます。
「それはね」
「場所はわかっていても」
「その妖精がいるから」
難しいというのです。
「それでも挑戦してみるかい？」
「そうさせてもらうよ、面白そうだしね」
こうしてでした。商人はギリシアに向かいました。そして地図を手にスパルタの海に出ました。
スパルタの海はとても青くて奇麗でした。とても静かで穏やかです。その海に小船で出ました。
商人はそこでも地図を見ていました。そうして目的地の上に来たところで。

海の中に飛び込みました。そのまま海の中を泳いでいきます。
そしてその底に。財宝を見つけました。
財宝は色とりどりの宝石や真珠、それに金や銀です。それが一体どれだけあるのか見当もつかないまであります。商人はそれを見て思わず飛び上がりそうになりました。
「うわ、これは凄いな」
商人は海の中で呟きました。
「これだけのものがあるんだ」
「おい」
しかしです。ここで声がしてきました。
「御前は誰だ」
「むっ、まさかその」
商人はその声を聞いてすぐに察しました。その声の主が誰なのか。
「妖精か？」
「そうさ、妖精さ」
出て来たのは人間に似てはいても全身鱗だらけの青い身体の男でした。服は着ておらず鱗がそのまま鎧になっているようです。
長い髭も髪の毛も緑色でまるで海藻です。そして右手には三叉の槍を持っています。
「トリトン様の部下でスクルゴスっていうんだ」
「あんた何でここにいるんだ？」
商人は落ち着いてその妖精に尋ねました。
「一体全体」
「決まってるだろう。この財宝を守ってるのさ」
「そうなのか」
「そうさ。この財宝は誰にも渡さない」
妖精は強い声で言ってきました、
「絶対にな」
「絶対にかい」
「若しこの財宝を手に入れるっていうのなら」

妖精のその言葉が剣呑なものになってきました。何時の間にか財宝の前に来てそのうえで商人からその財宝を守ろうとしています。
「俺が許さないからな」
「許さないのかい」
「その髪の毛一生生えないようにしてやる」
右手の三又の槍で商人を指し示して言ってきました。
「一本もな」
「一本もかい」
「それが嫌なら帰った帰った」
強い声で商人に対して告げます。
「わかったな」
「いやいや、待ってくれないかい？」
しかし商人も負けてはいません。ここであらためて妖精に対して言うのでした。
「君の話は聞いたよ」
「聞いたなら帰るんだな」
「だから待ってくれ」
また妖精に対して言います。

第三章

「話をしよう」
「話を？」
「そうだよ。とりあえず君はこの財宝を守ってるんだね」
「そうだ」
むべもない口調で商人に対して答えてきました。
「その通り」
「それはわかったよ。それじゃあね」
「それじゃあ。今度は何だ？」
「僕は今面白いものを持ってるんだ」
こう妖精に対して切り出しました。
「とても面白いものをね」
「面白いもの？」
「そうさ。それをあげようか？」
妖精の顔を見て思わせぶりに笑いながらの言葉です。
「欲しいかい？」
「一体どんなものだ、それは」
「それは海の上に置いてきたんだ」
商人は妖精にこう応えながら頭の中で考えていました。これからどう言うかです。
「実はね」
「それなら今はないのか」
「けれどすぐに持って来られるよ」
「すぐにか」
「そう、すぐに」
こう話すのでした。
「それをあげようか」
「わかった。それならだ」

妖精は商人のその申し出を受けてです。あらためてこう言ってきました。
「それが俺の気に入ればだ」
「うん、それで？」
「その時はこの財宝と交換だ」
そうするというのです。
「それでいいな」
「ああ、いいよ」
商人は笑顔で妖精の言葉に応えました。
「それでね」
「よし、それなら持って来い」
妖精はむべもない口調で商人に告げました。
「すぐにだ」
「わかったよ。じゃあすぐにね」
「よし、それなら」
こうしてです。商人は一旦小舟に戻りました。そうしてそのうえで一旦スパルタの街に戻りました。その間ずっと何をあげようか考えていました。
「さて、言ってはみたものの」
全部思いつきです。口八丁手八丁とはこのことです。
「何をあげようかな」
考えてもこれだというものが思いつきません。何しろ妖精が守っている財宝はかなりのものだからです。それと釣り合うものというとどうしてもです。
思いつかずに街の中を歩き回ります。スパルタの街はとても賑やかです。市場には人とものが溢れ商いが行われていました。その中で、です。
「へえ、チュニスのかい」
「そうなんですよ。チュニスのガラス細工の品です」
こんなやり取りを聞いたのでした。

「それなんですよ」
「これは珍しいな。実はね」
一方の声の主が言うのでした。
「スパルタにはこんなものないからね」
「あっ、そうなんですか」
「ないよ。ガラスなんてとても」
こう話すのでした。
「ないからねえ。価値があるよ」
「いい商いをしてるなあ」
商人はそのやり取りを聞いて思いました。
「チュニスのガラスなんてスパルタじゃ高く売れるからな」
「それじゃあね」
「はい」
「高く買わせてもらうよ」
一方の声の主がまた言いました。
「そちらの希望通りの値段でね」
「おや、太っ腹ですねえ」
「だからスパルタにはないんだよ」
そのガラスがだというのです。

第四章

「ガラスなんてね」
「ガラスがない」
商人はこのことを頭の中に入れました。
「そうだよなあ。スパルタにはガラスがない」
「だから価値があるんだよ」
「そして」
話を聞いてです。頭の中で自然と考えていきました。
あの財宝のこともです。財宝にしてもです。
「金も銀も宝石もこの地上には滅多にないから価値がある」
このことを考えるのでした。
「けれどあそこにはある。あそこにないものは」
こう考えていってです。そうして。
商人はすぐに市場で色々と買いはじめました。そうしてそのうえであの財宝を守っている海の妖精のところに戻ったのでした。
そこに戻るとです。やっぱり妖精がいました。妖精はとても厳しい顔をして容認を出迎えました。
「また来たんだな」
「ああ、そうだよ」
商人は明るく笑って妖精に答えました。
「こうしてね」
「財宝はそうおいそれと渡すわけにはいかん」
「わかってるさ。だからこっちも」
「こっちも？」
「財宝を持って来たよ」
こう彼に言うのでした。
「それをね」
「財宝をか」

「その財宝と交換しないかい？」
商人はこう提案しました。
「あんたが守っているその財宝とね」
「そうだな」
妖精は商人のその言葉を聞いてまずは考える顔になりました。
「その財宝に価値があればな」
「交換してくれるね」
「妖精に二言はない」
妖精は強い言葉でこう言ってきました。
「絶対にだ」
「言ったね。それじゃあその財宝はね」
「うむ」
「船の上にあるんだ」
そこにだというのです。
「その財宝を積んだ船を持って来たんだ」
「その財宝をだな」
「そうだよ。まずは海の上にあがってくれ」
また妖精に対して話します。
「これからな」
「わかった」
妖精は彼のその言葉に頷きました。
「それならだ」
「よし、じゃあ見てくれ」
こうして商人と妖精は一旦海の上にあがりました。そのうえでその船を見ます。見ればその船の上には。
「むっ、これは」
「どうかな、これは」
「こんなものを持って来てくれたのか」
妖精はその財宝を見てその魚に似た目をしばたかせました。
「これは凄い」

「そうだろ、凄いだろ」
「羊の毛にそれにだ」
まずは堆く積まれた羊の毛が目に入ったのです。
「孔雀の羽根、それにガラスまでか」
「ガラスは高くついたよ」
そのガラスのないスパルタで買ったからです。
「それでもね。どうかな」
「他のものも素晴しい」
見ればその他の財宝もです。妖精によっては非常に価値のあるものでした。それがどうしてかというと。それは商人から言ったのでした。

第五章

「地上にあるものだけれどね」
「しかし海にはないものだ」
「うん、海にはないよね」
「そうだ、だからこそ欲しい」
妖精はついつい本音を口にしてしまいました。
「これを全て。いいか」
「いいよ。ただしね」
「言った筈だ。約束は守る」
これが妖精の返答でした。
「絶対にだ」
「よし、それじゃあね」
「うむ」
「交換しよう」
商人はあらためて妖精に対して提案しました。
「それでいいね」
「いいとも。それではだ」
「君の財宝と僕の財宝を交換して」
「そうしよう。それではだ」
こうしてでした。商人は持って来た地上の財宝と引き換えに妖精の財宝を手に入れたのでした。そうして喜びに満ち溢れた顔でカルタゴに戻ったのでした。
その彼にです。友人が尋ねました。
「若しかしなくてもやったのかい」
「うん、やったよ」
商人はその顔で友人の問いに答えました。
「無事ね」
「髪の毛はちゃんとあるな」

「見ての通りだよ」
ふさふさとしています。憎らしいまでに豊かです。
「この通りね」
「そうか。本当に成功したんだな」
「そうだよ。財宝は僕のものだよ」
「一体どうやって手に入れたんだい？」
友人が次に問うたのはこのことでした。
「一体。今まで誰も手に入れられなかったのに」
「それは簡単だよ」
商人は明るい顔で友人のその問いに答えました。
「相手の欲しいものをあげればいいんだよ」
「相手のかい」
「そう、相手のね」
こう話すのでした。
「そうすればいいんだよ」
「相手の欲しいものを」
「例えばそこにはなくて別の場所にあるものを渡す」
かなり具体的な言葉でした。しかし事情をよく知らない友人にはわからない言葉でした。
「そうすればいいんだよ」
「どういうことだい、それは」
「言ったままだよ」
商人もそこまでは言いません。
「それだけだよ」
「？」
「商売の基本だよ」
首を傾げる友人にまた言いました。
「それだけだよ」
「やっぱりわからないけれど」
「まあ考えればいいさ」

答えは出しましたがそれでも何処かその答えなのかは言わないのでした。
「そのことはさ」
「何かわからないけれど智恵を使ったのかい」
「そうだよ」
このことは話しました。
「それで手に入れたんだよ」
「ううん、智恵か」
「その人が持っていないものをあげればいいんだよ」
何気にまた言いますがそれは友人にはわからないことでした。しかしそれでもです。商人が財宝を手に入れたこと、それは紛れもない事実でした。

カルタゴ人と海の妖精　　完

２０１０・７・３０

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6522o/

カルタゴ人と海の妖精

2010年11月1日22時25分発行